CORE

カナダ先住民クリー族のサンダンス儀礼
――サスカチュワン州ホールレイク居留地の事例――

谷　口　智　子

1．クリー族ホールレイク居留地とサンダンスの背景

筆者は2016年８月３日から８日までのサンダンス儀礼とその前夜祭に参加し、フィールドワークを行った。場所はカナダ、サスカチュワン州ホールレイク居留地である。サスカチュワン州の首都サスカトゥーンから、車で６、７時間北上した場所、ホールレイクという湖のそばに居留地はある。クリー族が現在600名ほど住んでいる[1)]。本論はそのクリー族のサンダンス儀礼（2016年夏）についてのフィールドワークに基づいた調査報告書である。

借りた家の目の前に小学校から高校まで一貫性の学校があった。筆者がお世話になったケネッチという男性とノラというメディスン・ウーマン（地域のシャーマンのような役割）の夫婦がいる。ケネッチはイーグル（鷲）クラン（氏族）出身で、ノラはベアー（熊）クラン出身だ。カナダの先住民族クリーの社会は母権制社会で、女性の家に入り婿に入るパターンが多いようだ。生まれる子供達は、基本的に母親のクランに入る。総じて女性の立場や力が強い。それは女性が生命を育む性だからで、創造主と直接的に繋がることができるためだ。

女性が生理のとき、何物にも代え難いパワフルな力が宿る。月経を「ムーンタイム」と呼ぶ。「ムーンタイム」は、ダイレクトに創造主と繋がる女性だけが持つ、最もパワフルなセレモニーである。故に、自分の中にあるネガティブなモノを他者に渡してしまいやすく、また他者のネガティブなモノを受け取ってしまいやすいセレモニーである。他者を傷つけてしまう可能性があるほど、パワフルである[2)]という。ムーンセレモニーは創造主と個の血の浄化の儀式で、パワフルで創造主と繋がりやすいので、かえって力が強すぎていろんな禁忌（タブー）が生じる。

例えば、サンダンス儀礼の準備中に、一部の女性が月経中だったが、彼

女らは祭儀の準備(後述する「タバコ・タイズ」作り)をその間、手伝うことができなかった。月経中の女性は、祭りに参加することもできないという。「ムーンタイム」中の女性は、何者にも代え難い神聖な存在で、ただ何もせず、安静にする。家族のための料理もしないそうだ。

この男性と女性の関係が、儀礼にも反映される。ケネッチによれば、男性が創造主と繋がるのは、せいぜい射精の一瞬くらいなのだそうだ。それに比べて、産む性である女性は、常時、創造主と繋がることができる。特に月経中の女性は最強で、それゆえに、いろいろな行動制約(タブー)が生じるらしい。

この世界観が、男性儀式であるサンダンスと、女性儀式であるウーマンズ・セレモニーの考え方にも影響する。サンダンスで、男性がピアッシング等のある種の苦行をするのは、女性の出産時の傷みに比べるべくもないが、その傷みをわずかでも体験し、創造主との繋がりに近づくため、であるという(ウーマンズ・セレモニーについては、沖縄の久高島のイザイホーに似ているということ以外、ここでは詳述しない)。したがって、男性儀式のサンダンス儀礼の本質は、苦行であり、祈りであるのだ[3)]。

ケネッチとノラの話に戻ると、彼らはお互い再婚で子供がそれぞれの連れ子、養子、二人の子を含め12人ほどいた[4)]。どの家族も子供は多い。離婚経験者もシングル・マザーやシングル・ファーザーも多いが、再婚するケースも多く、筆者が知り合った人々は再婚家族が多かった。親子になる縁を大事にして、子供は養子も含め、皆で育てており、一家族はほぼ、大所帯である。ケネッチの家には、孫も含め、子供は1ダースほどいた。従って子供の年齢層もバラバラであり、3世代が一軒の家に住んでいた(彼らは事情があって親が育てない孫を養子として育てていた)。

ケネッチはメディスン・ウーマンであるノラの夫で、サンディ・ベイ居留地出身だ。先住民の神話や儀礼、世界観に非常に詳しく、伝統を後世(7代末までの子孫)に伝えようとしている。ケネッチによると、生まれてくる子供は天でどの親を選ぶかをあらかじめ決めていて、「この親でいいか」と創造主(クリエーター)に尋ねられるという。「イエス」と答えた者だけが、両親が生殖する瞬間、その卵にスピリットとして入ってくるという。そして7週間の間に自分の人生の青写真を見せられ、「それでいいか」と創造主にまた聞かれる。「イエス」と答えると、生まれてくるまでの9ヶ月間を、母の胎内を通して外部世界のさまざまな情報を見聞する。そして

月が満ちて生まれてくるとき、もう一度「この世界に生まれるか」どうか聞かれ、そこで「イエス」と答えた者だけが誕生してくる。つまり生まれてくるまでに3回「イエス」と言った者だけが誕生するという。そのような世界観があるため、親子になる縁（養子も含め）を彼らは非常に大事にするのだ。

ケネッチの故郷サンディ・ベイでは、イーグル・ハートマン（ゲリー）[5]というチーフがスウェット・ロッジなどのセレモニーを執り行っていたが、8年ほど前に亡くなって、居留地で行われる儀礼はなくなり、先住民社会は崩壊の危機にあるらしい[6]。

居留地にいる限り、仕事をしなくても18歳以上の成人は一人につき政府から毎月8万円ほどの生活保障が与えられる（カナダ政府の先住民保護政策による）。子供を一人産めば18歳まで毎月2万5000円ほどの育児手当が支給される（養子も含む）。子供を1ダース育てれば、育児手当だけで月収30万円だ。彼らは働かなくても食べていけるので、生きる目的が見つからなくなる。テレビ中毒、アルコール依存症やドラッグ中毒などに溺れ、運動せず飽食するばかりで皆不健康に太っていく。居留地の中にいれば、安全な鳥籠だが、外に出れば差別にあったり、仲間から離れて住むことになるので、結局居留地に戻ってきてしまう。そこにいる限り、手厚い社会保障のお陰で生きていけるからだ。悪く言えば、働かなくても惰性で生きていける。これは先住民社会を蝕む病かもしれない。「神話や儀礼は、だからこそ彼らの生の意味やアイデンティティを確認する上で、必要になる」とケネッチは考えている[7]。

58歳のケネッチはそのサンディ・ベイ出身で、ホールレイク居留地のクリー族に数年前サンダンスをもたらした。彼は外ではネイティブ・シアター・カンパニーで働く演劇人で、舞台演出のサポート等もする[8]。筆者をこのサンダンス儀礼に誘ってくれた日本人女性、坂口火菜子さんも舞台女優で、彼女はケネッチとその縁で2002年に知り合った。

ホールレイク居留地で、ケネッチは2007〜2008年頃、ノラと再婚し、2014年にサンダンスを始めた。サンダンスは男性儀礼で4年間続けることが必須なので、2014年に始めたケネッチは2016年の今年で3回目、来年度が最後になる[9]。ケネッチがサンダンス儀礼を行う資格を得たのは、ラコタ（＝スー）族のサンダンス正統後継者19代目ウィリアムに教えを乞い、20年以上、ウィリアムのもとに通ったからだという。ケネッチが行っ

たサンダンスの初回（2014年）は19代目ウィリアムも監修に来たそうだ。坂口さんが日本人のサポーター（ヘルパー）を連れて団体で参加したのもそれ以降である。

サンダンスを開催するには、かなりの資金が必要だ。2016年の今回は、およそ50〜60名のクリー族やデネ族、他の先住民族等が、遠方の各地からやってきてダンサーやサポーターとして参加していた。主催者がほぼ全部用意してサポーターを歓迎する。中には出資を援助してくれる人もいるが、物々交換が慣習の先住民社会では、出資はほぼ主催者で、ゲストは4日間、準備の前後一週間のティピでのキャンプ生活を含めて、代金を支払わず、滞在することができる。その間の飲食費も基本的にすべて主催者持ちだ[10]。この気前のよさが、伝統的社会の価値観では重要だったのだ。持てる者は持たざる者に奉仕する。富は社会全体に行き渡らねばならない。

2．パイプ・セレモニーとスウェット・ロッジ

クリー族は儀式の中で酒を飲まない。タバコの葉でパイプ・セレモニーをする。その他、石を高温で焼いて、ロッジの中で高温の石に水をかけて蒸気を作り、それを浴びた参加者の邪気を払ったり、悩みを吐き出させたりするスウェット・ロッジも行う。スウェット・ロッジはある種の共感サークルだ。参加者が吐き出す悩みに対して、スウェットを執り行う人を始め参加者が「ホウホウ」と同意をする。そうすることによって、人々の日常の悩みを共感的に聞き、嘆きを吐き出させ、日常の垢や厄を払い落とし、浄化してしまう[11]。

今回参加したサンダンス儀礼の期間の4日間中、毎日違う人がスウェット・ロッジを夕方行っていた。初回はメディスン・マンのジョンが行っていたが、多くの子供も参加していて、和やかな優しい雰囲気で、とても評判が良かった。スウェット・ロッジは、それを行う人の技量や状態でかなり受ける印象が変わってくる。筆者は3日目のデネ族のアランのスウェット・ロッジを受けたが、これはスウェットの間中、彼がずっとテノールで歌ってくれてとても素晴らしかった。シェアリングのとき、福島出身の小川純子さんが、2011年3月11日の東日本震災以降、彼女が受け取ってきた悲しみを話した。「震災は自然災害で仕方のないことだけれども、原発事故は人災で仕方がない訳ではない」と。福島の原発で荒廃した故郷のこ

と、木々や自然や動物のこと、汚染された大地や海の生物のことを話し始めた途端、歌おうとしたアランが急に咳き込み始め、歌を続けることができなくなり、急遽別の参加者のバルという白人女性が太鼓とともに歌い続けた。アランは荒れ狂う熊のように咆哮を始めた。津波や福島の原発事故で死んだ動植物や人間のやるせない怒りや悲しみを全部吸い取って、狂ったように猛り咆哮し、むせび泣く熊のように、一切を吐き出した。あれほど激しいシャーマニズムを目の当たりにしたのは初めてで、筆者も驚愕した。

翌日アランが語ったところによると、彼女が「福島」と語りだした途端、東北の震災で死んだあらゆる生物の思念が首の後ろから電気的信号として彼の中に直撃で入ってきて、その悲しみを全部飲み込んで、吐き出すしかなかった、という。直後彼は体力気力とも消耗し、スウェット・ロッジの中に倒れこんでいた。翌日も前日の影響を引きずっていて、まだ調子が悪い、と当の本人に伝えていた。彼女はアランにお礼を言って、自分の持ち物のうち、東南アジアの珍しい巻きスカートを提供した。特に謝礼は要求されないが、心からのお礼として。持つ者はどんどん放出し、他者に分け与えていく。ここは貨幣経済でなく、物物交換や技術交換で成り立っている経済システム、ギフト・エコノミーの世界なのだ。

サンダンスに2年参加している小川純子さんはパイプ・セレモニーについても詳しい。彼女の体験談を聞いた。

「2014年に居留地ホールレイクを訪れてサンダンスのセレモニーに参加した時、初めてのパイプ・セレモニーを体験した。サンダンスのラウンドが終わるとダンサーより彼らの聖なるパイプがサポーターに手渡され、パイプ・セレモニーが始まる。その他にも、折に触れ彼らが祈りを分かち合いたい時にパイプ・セレモニーは開かれる。満月の女性のための集いに女性のパイプ・ホルダーを中心にパイプ・セレモニーが行われたり、スウェット・ロッジの中でも最初に行われる場合がある。

パイプに母なる地球からの贈り物であるタバコを詰め（サンダンスの場合はダンサーが祈りと共に詰めておく）、東西南北、父なる空、母なる大地とハート（中心）に向かい、感謝と祈りを捧げる。パイプ・ホルダーがタバコに火をつけ、煙を吐き出す。輪になって同席しているメンバーにパイプが回ってくる。創造主と私の祖先とつながる煙であると長老（エルダー）達に教わった。母なる大地の産物タバコを火の助けで吸うことはエ

ネルギーを心身にいただくこと、煙を吐き出すことは自分の心を開き伝えることとも聞く。初めてパイプを手にして祈りタバコを吸い、細い煙を吐き出すと確かに祖先とつながるような、特に亡き祖母と一緒に煙の中にいるような感覚になった。生きとし生けるもの、私につながるすべてのものへの感謝も満ちてくる。立ち上る煙の先ははるかな空で創造主へ続く道の可視化されたもののようでもあった。それから何回パイプ・セレモニーに列しても同様に感じる。今年は1月に逝った祖父にも煙を通して会えたようでもあった。

パイプ自体は売買してはならないそうだ。ピース（インディアン）パイプは、自分で作るか、ギフトとして手元にやってきたものをそれぞれが持っている。例えば、サンダンサーのブラッド・スペンス氏のパイプは、物語がある。200年ほど前に旅中の平原先住民の赤馬がある場所で足を止め、動かなくなった。どんな手段を取っても馬が微動だにしない。足元の土を掘ってみると千年以上前のものと考えられる赤い石でできた火皿（ボウル）が出現したという。それを代々受け継いだ魂の友が、サンダンサー（魂の成熟者）スペンス氏への贈り物にしたそうだ。」[12)]

3．サンダンス儀礼にまつわる神話と東西南北の色について

ところでチーフのケネッチは先住民の世界観や神話や儀礼について熟知している。ケネッチはことあるごとにネイティブの世界について我々に語ってくれたが、そんな彼の講義を「ケネッチ・カレッジ（ケネカレ）」と名付けて通っている日本人が3名ほどいた。彼らは毎年ケネッチのサンダンスに通っている。カナダや宮崎で行われたウーマンズ・セレモニーにも参加している。ケネッチは師匠で、彼らは言うなれば異国人の弟子だ。ケネッチは非常にオープンな人で、アメリカ先住民に代々続いているサンダンス儀礼といういわば秘儀にも、自分が執り行う初回から、外国人である日本人の参加を許してきた。

サンダンスの起源は約2300年前にラコタ（＝スー）族に White Buffalo Calf Woman（白いバッファローの仔の女）によってパイプにまつわる七つの儀式（あるいは道具）の一つとして伝えられた、と語られている[13)]。

「飢餓の村人を救うため、二人の若者が野牛狩りに出かけた。平原に迷

い出た二人は、遠くから不思議な輝きを放つ何かがやってくるのに気づいた。二本足で､長い髪を風になびかせ､背中に何やら背負った美しい女だった。そう知るや、若者の一人は欲情に駆られた。ひとりっきりで守るものもいない女をものにするのはたやすいこと。迫られた女は着物の袖を広げ若者を迎え入れた。すると、小さな煙の竜巻が起きた。竜巻が消えると、女の袖から若者が骸骨になって崩れ落ち、灰となり風に吹かれて消えた。もう一人の若者は、女を襲うことなど思いもよらない真の勇者で正しく生きる賢者だった。若者は美しい女の神秘的な力に感服し、“村人にどうぞ教えを”と女を村に連れ帰った。

女は村人を集めると、背の荷を解き、トウモロコシや瓜の種を与えた。次に、ひとの衣食住となる野牛を“大いなる神秘”からの贈り物として敬うように、と水がめの小石に野牛を映して見せた。そして自然や他人を尊重する正しい生き方や祈り方、そのための儀式を教えた。最後に平和のキセルを取り出して長老に授け、“このキセルでタバコを吹かせば、その煙で願いが天に届く。キセルとともに皆が祈るように毎日を生きていけば、困ることはない”と告げると、再来を約束して村を去って行った。

村人が見送る中、女の後ろ姿は黒い野牛に変わり、茶、赤と色を変え、しまいには人が目にすることのできる最も神聖な生き物とされる白い野牛の子牛に変わった。子牛が消えた地平線からはやがて野牛の群れが現れ、村人はそれから飢えを知らなかった。」（ラコタ族『白い野牛の子牛の女』の神話）[14)]

「白いバッファローの仔の女」は、パイプにまつわる七つの儀礼（もしくは道具）を伝えたという[15)]。

７という数字は、カナダ・アメリカ先住民にとって、聖なる数字だ。世界は東西南北の四方向以外、天と人（自分の中心にあるハート）と大地に分かれている。これらは聖なる七方向である。人や動植物が住む世界の中心に天地を貫く中心軸（Axis Mundi）があり、それが天の創造主、大いなる神秘や、大地と繋がる垂直軸とすれば、水平軸に東西南北がある。中心軸の周りにサークル[16)]を作る。それがティピ（背の高いテント）の真ん中に作られる石で丸く囲んだ竈である。サンダンスの場合は、サンダンスの前夜祭 Tree Day の午後、木（クリー族のホールレイク居留地の場合は周辺にたくさん生えている白樺の木）を切り倒してきて、会場になる広場に

参加者全員で運び込んで深い穴を掘って埋め立てるが、一年の間維持されるその木は、人々の祈りの対象として、天の創造主に願いを届ける媒体になり、その地域を護る。

4．サンダンス儀礼の準備

①結界作り―七方向の世界観と七色の意味―

七方向の世界観については先に述べた通りであるが、七色の意味も説明しておこう。東西南北の色は文脈によって異なるらしいが、ホールレイク居留地のサンダンスの場合（サンダンス正統継承者19代目ウィリアムのやり方に従えば)、黄（東)、黒（西)、白（南)、赤（北）となっていた。儀礼の準備期間、私達日本人のサポーターチーム（９人）は、ケネッチの指導のもと、祭りの準備で大忙しだった。男性達はサンダンス会場と野営上に５つのティピと２つのスウェット・ロッジを建てるのを手伝う肉体労働が待っていた。女性達はサンダンス会場の中心軸になる聖なる木の周辺に丸く円形のサークルを作る結界に用いる「タバコ・タイズ」（テルテルボウズのようなもの）を作るのに大忙しだった。ケネッチの指導のもと、タバコ・タイズ作りが行われた。筆者の記憶によれば､東西南北の色のうち、黒だけが102個で､残りの三色は各101個ずつ用意するように言われた（ただし、赤だけは結界用に余分に105個作ったので、計206個になる)。このタバコ・タイズは煙草の葉をホワイト・セージなどで燻し、浄化（スマッジング）して、黄、黒、白、赤など四色の布を10センチ四方くらいに切ったものに包んで、ロープで10センチ間隔で吊るしていく、というものだった。会場の写真を撮ることはできなかったが、余ったタバコ・タイズを持ち帰ってきた（写真１)。これは丁寧に一つ一つスマッジングして、決して床にはつけないように、高いところにおいておくよう言われた。一つ一つが厳格に準備される。同時に、ケネッチの妻のノラはケネッチのサンダンス用のスカートを縫って準備していた（写真２)。

また､あらかじめ用意して行くよう言われた布（綿等の天然素材のもの）は七色から選ぶ。黄（東)、黒（西)、白（南)、赤（北）など東西南北の色の他に、紫、青、緑、グランマザープリント（細い花柄プリント）を選ぶことができる。紫は癒しの色、青はスピリットの色、緑は地球の色、グランマザープリントは女性の色だという。また、東西南北の色は、４つの人

写真 1　タバコ・タイズ作り（右側がケネッチ、中央が筆者）

写真 2　ケネッチのサンダンス用のスカートを妻のノラが縫って準備する

種の色でもあるそうだ（白い人、黄色い人、赤い人、黒い人、ちなみにアメリカ先住民は自分達のことを「赤い人」だと思っている）。この布は、聖なる木を切り倒してサンダンス会場の真ん中に中心軸として建てる時に、祈りを込めて枝に縛り付ける。筆者は 1 m 四方の青い布と紫の布を結

びつけた。スピリットの色と癒しの色だ。これもあらかじめタバコの葉を包み、スマッジングしておき、その後は同様に床には置かず、聖なる木の日（Tree Day）まで大切に保管しておくよう言われた。

② Tree Day ―中心軸を建てる―

準備期間は 2 、3 日間続いた。その間私達はブッシュを切り開いてサンダンス会場やキャンプ・サイトを整地したり、自宅でタバコ・タイズを作ったりしてサンダンスの準備をしていた。その後、2016年 8 月 3 日午後 3 時頃より、聖なる木（白樺）の切り出しが始まった。Tree Day（聖なる木を立てる日）だ。ケネッチがあらかじめ目印をつけていた形のいい白樺の木（創造主と祖先達が降りてきやすい股を持った木が選ばれる）を集まった参加者皆で斧を入れる。最初の一撃を加えるのは、少女と決まっている。創造主へのメッセージや祈りの通路として選ばれる新しい木（ヴァージン・ツリー）には、処女が斧を最初に入れるのだ。ケネッチの孫娘の 5 歳の少女が最初に斧を入れ、後から参加者達が男性、女性の順で斧を入れていき、最後に切り倒した。切り倒した木は地面につかないようにし、参加者全員で木を持ち上げ、およそ数百メートル離れた会場まで運んだ。

サンダンス会場となる聖域の中心では、木を建てる穴があらかじめ掘ってあり、そこに根元の方から木を入れ始め、ロープをかけて四方位から起こし、男性数人がシャベルで土をかけていき、最後はしっかり踏み固めた。木を建てる前に希望者は用意してきた色とりどりの布を、自分が気に入った枝に願いを込めて結びつけていった。

③円形の結界作りと東西南北の門

木を立てるとは、垂直の中心軸を作るということである。その木は聖なる木として創造主のメッセージや祈りの通路となる。木を中心に、半径 7 ～ 8 m ほどの円形の聖域[17]を作っていく。そこが結界となる。あらかじめスマッジングして用意してきた赤色の布で包んだ105個のタバコ・タイズを括り付けたロープを結ぶために、あらかじめ用意していたチェリー・チョークの枝[18]をきれいに成型して色を塗り、タバコ・タイズを 1 本に 1 個結びつけたものを円形上の地面に差し込んでいく。それが聖なる木を守る結界の枝だ。東西南北の門はチェリー・チョークの枝葉を落としたものだが、門から門の間の円形の線を埋めていくのがその105本の枝である。

写真 3　右側の S さんが持っている結界用のチェリー・チョーク、
先端に赤いタバコ・タイズつき（中央が小川純子さん、左側が筆者）

それぞれにスマッジングしたタバコ・タイズを 1 本ごとに結びつけてある[19]。門を作り、枝を刺し、ロープを仕上げに円形上に結びつけていき、境界が作られる。その周辺にはバッファロー・トレイルといってダンサーが日の出と日の入りの一日に 2 度通る道が用意されている。 4 日間踊るダンサーが日の出と日の入りの際に利用するバッファローの道で、一日に 2 度だけ使われる。そこは太陽やスピリットだけが通ることのできる門である。結界の枝は最後の破壇の儀式の時､参加者の一年を守ってくれるよう、持ち帰ることができる（写真 3 ）。

④晩餐

8 月 3 日の Tree Day は、参加者皆で共食した。ケネッチの指示で、日本人のサポーター達が米を炊いてカレーやサラダ等を作った。中央のテーブルにいろんな料理を並べ、自由にお皿から取ってもらった。父なる創造主と母なる大地に少量とりわけておき、皆で天の創造主と大地の母に食前の祈りを捧げ、人が共食した後、最後にその 2 つの皿の料理は火にくべた。火を通して創造主と祖先達に捧げるそうだ。日本人女性 A さんは翌日から 4 日間飲まず食わずのサンダンスに参加するため、これが最後の晩餐となり、大量に食べ、水分を補給していた。彼女は当日夜から、会場近くのダンサー女性専用のティピに一人で泊まり込むことになっていた。ここから彼女は 4 日間、聖なる世界の住人となり、飲んだり食べたりできず禁欲し、

世俗とは隔絶され、祈り人となる。

5．４日間のサンダンス儀礼

①４日間の断食断水（苦行と祈り）

結局、2016年のサンダンスで、最初から４日間禁欲して最後まで踊り続けたのは、主催者のケネッチとＡさんだけだった。ケネッチは主催者なので、彼は毎日客人とともに共食し、飲食は続けていた。ということは、純粋に禁欲していたのは、日本人参加者のＡさんだけだということになる。飲食もシャワーもできないティピ生活なので、トイレに行くか、寝る以外は、ダンスするしかなくなる。つまり、一日７ラウンドを日の出から日没までこなす以外は、寝て休む他やることはないのだ。８月初旬のカナダ、日中は暑いが、朝夜は零度ほどまで冷え込む。初日は火も焚いておらず（任されていた火の番人がいなかった）、ティピの中にシートも敷いてなかった。彼女は外に焚いてあった火のそばで暖をとって待っていた。あとで気づいた人がメディスン・マンのフランシスに頼んで、ティピの火を熾しに行ってもらった。フランシスはティピの竈に火を熾し、下に敷くシートや毛布を持ってきて、ティピの入口を毛布で塞いでくれた。

翌日早朝、Ａさんはケネッチに起こされ、スウェット・ロッジでダンス前の心身の浄化を行った。そしてダンサーだけが通ることのできるバッファロー・トレイルを通ってスピリットの門である東門から入り、日の出の際の最初のラウンドを踊った。この日から彼女は一日平均７ラウンドのダンスを飲まず食わずで踊ることになる。一つ一つのラウンドは、創造主、太陽、大地など、祈りの対象が変わる。ステップは同じだが、一つ一つのラウンドで、踊る図形のラインも変わっていく。この一連の動きについては秘儀であるし、継承者の一人であるケネッチ以外説明できないので、筆者はこれ以上説明することはできない。ただ、魔法陣のようなエネルギー・ワークである、ということだけは分かった。

１日目終了。ダンサーは飲み食いできず、一人で長い夜をティピに籠るが、翌日からの２名の参加者（ケネッチの17歳の養子トロイと、クリー族のメディスン・ウーマンのキャシー）は、ダンサー用ティピに籠るため、できるだけ食べていた。ケネッチによると、観客（サポーター）達がキャンプ・サイトでたくさん飲食する一方で、サンダンス会場のダンサー達は一切飲

食できず、禁欲する。「こちら」側は飲食することで、「あちら」側のダンサーにサポートのエネルギーを送る。彼らは日中祈り踊り続けることで、「こちら」側にエネルギーを送る。いわば彼岸と此岸のエネルギー循環なのだ。だからおおいに食べることを楽しみ、飲む方が良い、ということだった。筆者は「とはいえ、Aさんは水も飲まず4日間を乗り切れるのだろうか」と心配しながら、固い鹿の肉と格闘していた（Aさんは日本の家族に言えば反対されるので、相談せずにダンサー参加していたそうだ。2年前もダンサーに合わせて4日間断食したので、大丈夫だと思ったのだろう）。

2日目からは先程の2人が加わってダンサーが4人になった。ちょうど男2名、女2名でバランスが良い。みんな人種もバラバラでステップもバラバラなのが面白い。この日も恐らく7～8ラウンドは踊っただろう[20]。筆者は一つ一つのラウンドが終わる度、サポーターに回されるパイプ・セレモニーを愉しんでいた。

②パイプ・セレモニー

チェロキー族の血を引く白人との混血ダニエルによれば、パイプ・セレモニーも創造主や祖先達と繋がる大切な浄化の儀式で、セレモニー中、感極まって泣く人もたまに出るという。筆者は「中立だったか？　感情的になったか？」と聞かれて、「中立だった」と答えた。皆慣れていて、パイプ・セレモニーの意味について説明してくれる人も特にその場におらず、他の人の型の真似をすることに必死になっていたせいかもしれない。しかも筆者は普段タバコを吸わないし、どうやって吸えばいいのかもわからないのだ。吸うと吹かすの意味さえ分からず、人にやり方を聞いた。パイプ・セレモニーも「白いバッファローの仔の女」が持ってきた7つの聖なる儀式（道具）の一つである。

パイプ・セレモニーで提供されるパイプは、パイプ・ホルダーとされている様々な部族の継承者が持ち寄った古いパイプがほとんどだった。いろいろな形のものがあり、短いものから長いものまで、それぞれの部族の動物の紋章が彫られていたり象られていたりする。パイプによっては古いものだけでなく、手作りの新しいものもある[21]。「パイプを愛でるようになでて吸うと、よく煙が出る」と、サンダンス参加2回目の小川純子さんが語った。彼女の吸い方は浮世絵の『キセルを吸う女』のように堂に入っていた。パイプ・セレモニーが一番至福の時間なのだそうだ。パイプの長い

棒（stem）と煙が出る口（bowl）の意味するところは、男根と女陰だそうで、双方を組み合わせて一つのパイプとして機能する[22]。煙が出る口に煙草の葉をつめて火をつける。天と地に捧げるため、額とハートの位置に吸い口を持ってきてまず祈りを捧げ、一服二服し、左隣の人に回す。数人から数十人でパイプを4巡する。タバコがなくなった段階で、あるいは4巡目は吹かさず、単に額とハートに吸い口をつけて創造主や祖先達に祈る。最後はその回パイプを託された責任者が参加者全員と握手をして、パイプ・セレモニーは終わる。

ダンサーからパイプが託される人は名誉職で、いきなり筆者が指名された時は驚いた。パイプを取りに行く時も、燃やしたホワイト・セージの葉で身体を頭のてっぺんから足の裏まで前後を燻して、東西南北の門を横切る時は時計回りに両腕を挙げて回転しながら横切り、南門に控えているダンサーのところまで取りに行かねばならなかった[23]。パイプを渡される時も、渡す人と渡される人がお互いに4回パイプを押して引いて、ようやく渡されるという祭儀上の形式があった。筆者は突然パイプを渡され、作法がよくわからなかったので、ダンサー用テントにアドバイザーとして控えていたメディスン・マンのフランシスのところにパイプを持って行き、セレモニーの作法を教えてもらった（本来はパイプを受け取った人がその回のパイプ・セレモニーを執り行う責任者になる）。パイプ・セレモニー自体は7つのラウンドが終わる度ごとに毎回行われた。パイプを渡される人はその時その時で異なり、太鼓を叩いて歌う人達のグループもあれば、サポーターやアドバイザーのメディスン・マン達のグループにも回ったりしていた。

③癒しの日（３日目）

3日目は4日間中最も特別な日だ。それは「癒しの日（Healing Day）」とよばれる。日本人で一緒に参加した針灸師の男性Tさんは、サンダンス参加3年目。彼は地元のメディスン・マン達も鍼灸で治してしまうので、ケネッチを始め、クリー族の信頼がとても厚い。私達日本人のティピには、彼に治療してもらおうと長蛇の列が連日ならんでいた。今年、彼は3日目からサンダンサーとして参加するようケネッチに提案され、自分の意思でダンサー参加した。3日目が「癒しの日」だからだ。昨年も2日間ダンサー参加したそうだ。その間断食断水しなければならない。いずれにしろ、今

回彼は初日から断食を行っていた。ダンサーに共感するため、また、自分が「あちら」側の世界に入る準備をするためである。単なるサポーターであった最初の2日間も人々のために身を粉にして奉仕し、ダンサーとしても3日目の「癒しの日」から、ヒーラーとして参加した。最初のラウンドから飛ばして踊ると疲れてしまうので、彼は少ない動きで踊っていたが、仲のよい歌い手のラリーに「今年は飛ばさないんだね」とからかわれ、2ラウンド目から「大丈夫か？」と疑うほど、リズミカルに楽しそうに大きな振りで踊り始めた。

午後のヒーリング・ラウンドが始まると、私達サポーター（ヘルパー）[24]は普段またげない東門から結界の中に入ることが許された。東門を入ると左右2列に並んだダンサー達の中を我々が通る。ダンサー達から彼らの持ち物（ホワイト・セージの枝葉やイーグルの骨の笛、イーグルの羽の扇等）で頭のてっぺんから足の先までバサバサ扇がれたり叩かれたり吸い取られたりして、私達の心身にまとわりついた日常の垢や罪穢れを払い落とされていった。一人が終わればまた次の人というように。3日目はダンサーが8名に増えていたので、8名に丁寧に全身浄化され、終わった時はかなり浄化された気分だった。精進潔斎しているダンサー達は、その時､我々を癒す「スピリット」になっていた。日本から参加したAさんは、麻の縄で私達を浄化してくれた｡メディスン・マンのジョンも特別参加で、彼の持っているイーグルの骨の笛で、身体の悪い部分をすぐさま見抜き、そこに笛をあてて邪気を吸い取ってくれた。筆者は右のこめかみと右の耳と左側の首の付け根を吸い取られた。人によって違うところを吸い取られていたので､「悪いところがなぜ分かるのだ？」と皆驚いていた。ダンサーは人々の悪い部分や邪気をそのヒーリング・ラウンドで落とすので、邪気をもらってしまうこともあるそうだ。そのため、3日目のラウンド全てが終わった後､彼らは「メディスン」という秘薬（門を飾るチェリー・チョークの木を削ってその皮を煮出したお茶）を少しだけ飲むことが許された。3日目の段階になると、ダンサーは一切の水分が摂れないのでますます乾涸びてしまう。したがって、スウェット・ロッジで浴びる蒸気が唯一の水分なのだ。彼らはスウェットの蒸気と3日目の夜に出されるメディスンだけで4日間の渇きをしのいだ。これを外側から見ると精進潔斎の「苦行」に見えるが、内側から見ると「祈り」だそうだ。4日間踊り続けたAさんの意識やエネルギーは、ますます澄み渡っているように見えた。

④スピリチュアル・ネームの名付けの儀式

2日目以降は、子供の親がタバコや布を聖なる木に捧げて、自分の子供にスピリチュアル・ネームを授かるよう､長老（エルダー）達に依頼する。人生の中では数回スピリチュアル・ネームを授かるチャンスがある[25)]。長老達と相談して、その年齢にふさわしい名前をもらう。名前は生まれる前から決まっているという。スピリチュアル・ネームをもらう儀式は、聖なる木にタバコや布を捧げ、長老達が伺いを立て得た名前をその子につけ、英語とクリー語で東西南北に向かって宣言する。「彼のスピリチュアル・ネームは、ビッグ・マンだ」とか「彼女の名前はスプリング・ガールだ」といった具合に、年少者の名前ほどシンプルだ。日本人参加者のうち、何度も参加している男性2人が、今回スピリチュアル・ネームを幸いなことに授かった。まず、ケネッチが東西南北に向かって「この男は、○○○という名前だ」と叫ぶ。その後、当人達が、東西南北のスピリットに向かって、その名前を大声で宣言する。そうすると、スピリット達への自己紹介が終わる。その後、みんなに挨拶して握手して回る[26)]。2人は周囲に生えている野生のブルーベリーを摘み、ご飯を炊いて、おひろめの儀式を行った[27)]。その料理は2人だけでみんなの分を用意しなければならない。まず創造主と母なる大地への皿をとりわけ、次に子供達、年長者、次に他の大人達、という具合に皿を用意していく。料理が得意な男性がいたので、摘んできたブルーベリーを、ライス・プディングのソースとして使用した。他にもさまざまな料理が並べられた。

⑤ダンサーとして参加（4日目）

私達日本人は、毎晩､「ダンサーとして踊る覚悟がある人は？」とケネッチに尋ねられた。皆なかなか覚悟が決まらなかった。飲まず食わずで何日持つだろうか？　しかし、一日くらいは大丈夫だろう、最終日だけ踊ろうと、覚悟を決めた。3日目、私達は、最後の晩餐をして、水分をたっぷり摂取し、一泊泊まる用意をして、キャンプ・サイトのティピ生活からダンサー専用のティピに移った。翌日ダンサーとして参加する日本人は、男性2名、女性3名になった。私達はダンサー達の住む聖域を「高天原」と呼んでいた。トイレもスウェット・ロッジも、ダンサー専用のものが設置してあるからだ。ティピの入口は、ダンサー・サイトのものも、キャンプ・サイトのものも含め、すべて東に向いていた。ダンサー専用のティピは一

つだけで男女別に順番に入り、キャンプ・サイトの大きめのスウェット・ロッジは2つくらいで数十人の人が入れるようになっていた。

早朝ケネッチに起こされたダンサー達はまずスウェット・ロッジに入って身を清めた。最終日はダンサーの数が多かった（男性7人、女性7人、計14人）ので、女性から先にスウェット・ロッジに入った。祈りを捧げるだけの短いものだった。女性も男性も浄化を終えると、身支度をして数十メートル離れたサンダンス会場に到着した。バッファロー・トレイルを通って、ダンサーだけが通常許されている東門から入場した。東門は、通常、誰も横切ってはならない。それは日の出の方向で、スピリットがやってくる道だから、人が邪魔してはいけないからだ。また、サークルの中で浄化するので、邪気も東門から出ていく。うっかり人が横切れば、邪気をもらってしまうので気をつけなければならないそうだ。円形の結界線上を、缶にセージの葉を詰めて煙で燻して歩くスマッジ・ボーイが、うっかり東門を横切ってしまい、後でこっぴどく注意され、何度もスマッジングで心身を浄化させられていた。筆者も一度東門を横切りそうになり、ケネッチに注意を受けた。その東門からダンサーは、神聖なサークルに入る時と出る時だけ通る。3日目のヒーリング・ラウンドの時も思ったが、ダンサーは、神々のようなもの、「スピリット」の化身なのだ。

私達ダンサーもスマッジングで精進潔斎して、第1ラウンドの日の出のダンスを踊った。誰もいないと思っていたら、早起きして日本人の他の友人達が見に来てくれていた。第2ラウンドが終わる頃には、サポーターがだんだん増えてきた。

この日は前日までとうって変わって、朝から分厚い雲に覆われていて、涼しかったが、第2ラウンドが終わる頃には、分厚い雲が一掃されて、いつの間にか晴天になっていた。サンダンスの祈りの踊りは、基本的に前の人に続いてステップを踏んで行くだけなので、ダンサー達は全体の動きをそれほど把握している訳ではない。ケネッチが指示する通りに動いていく。一つ一つのダンスのステップは、シンプルな太鼓と歌のリズムに則って、シンプルに動いていくのみ。基本的にケネッチのステップを真似するのだが、人によっては自分のやりやすいように足を踏む。ステップすることで、相撲の四股を踏んでいるような感じがした。大地を踏み固める。さらに、ラウンドごとに祈りの対象が変わっていくが、動きそのものは魔法陣を描くような感じで、何らかの図形を描いている気がした。

筆者は「あれほど曇っていたのに、なぜこれ程すっきり晴れたのだろう？やはり踊りも祈りもエネルギー・ワークなのだな」と思った。そして踊りながら、太陽と雲の関係を考えていた。瞬間「太陽が出た」と思ったが、太陽は出たのではない、雲に隠されていただけだ。つまり潜在の世界ではすでに太陽は日中あって地球を照らしているが、それを阻んでいるのは雲なのだ。隠れて見えるものでも、潜在の世界では既に完全にあって、条件が整えば、現象として顕在の世界に現れてくる。

この踊りは「祈り」であり、「苦行」である。たった一日とはいえ、断食断水しているのだから。特に日中の暑い夏、水を飲めないのは苦しい。頭の奥が痛くなってくる。軽い熱中症の症状だ。ただ、自分が創造主のパイプになったかのように、呼吸に合わせて、シンプルに祈りながら踊る。私達の祈りのエネルギーが、聖なる木を通って、創造主に届く。木も私達ダンサーも、創造主の「パイプ」なのだ。

⑥破壇の儀式と共食

4日目の7ラウンドが終わると、結界を解き、サンダンス・グラウンドで皆で共食した。一切の飲食の影がなかったところに、これらを持ち込み皆で食すことに意味がある。円形の結界で用いた木や枝は全て取り去り、チェリー・チョークの枝を一年の守護として家路に持ち帰った。

5．サンダンス儀礼の特質（自己犠牲と祈り）

サンダンス儀礼の特質は、「苦行（精進潔斎）」と「祈り」である。まずダンサーは断食や断水をしなければならない。緯度が高いカナダとはいえ、日中は暑くなるので、全く水分を摂らず踊り続けるというのは、体力的にもかなり厳しい。特に4日間踊り続ける場合は、苦行だ。だから我欲を全く捨て去らねばならなくなるのだ。4日間踊り続けたAさんに聞いたが、「苦しみに意識を向けると苦しくなるので、そこにフォーカスはしない。むしろ、サポーターの祈りのお陰で、あるいは太陽や創造主のお陰で、私が踊らせていただける。その祈りのお陰で私は元気に踊り続けることができる。笛を吹く呼吸に意識を集中するので精一杯」と言っていた。キャンプ・サイトの皆が、食べたり飲んだりすることで、ダンサー達にエネルギーを回している、とケネッチが言った、その言葉を思い出した。いずれにし

ても、やり遂げるには、精神力と体力が必要だ。

サンダンス儀礼の特質が、「苦行」と「祈り」であるとして、その双方が特に特徴的に現れるのが、主に3日目と4日目に行われたピアッシングとフレッシュ・オファリングである。双方とも、現代に残された人身供犠の一種である。特にピアッシングは、男子のイニシエーションの要素もある。サンダンスは本来、男性儀式であるので（対になるのは女性のための儀式「ウーマンズ・セレモニー」）、男性のイニシエーション[28)]がサンダンスの最中に行われるのも、当然なのだろう。

①自己犠牲（ピアッシングと人肉の捧げもの）

まず、筆者が驚いたのは、3日目に行われたケネッチとジョニーの「ピアッシング」と「ロープ」である。ケネッチはサンダンスの主催者。年長者がまず行う、ということに驚いた。年少のものにやり方を示す、という意味もあるのかもしれない。とにかく、ケネッチが3日目のサンダンスの合間に、一番ハードな背中のピアッシングを、まずやってみせた。手順は、背中の両肩甲骨のあたりの皮に2カ所、数センチの切り込みを入れる。そこにロープを通し、4頭のバッファローの頭骨を、円形の結界の周りを4周引いて歩く。このピアッシングのためにダンサー自身がセレモニー中に木を鋭く削り自分の体を刺せるようにする。鉛筆を削るような方法で木の鋭い杭を作る。所々草が生えていたりして、なだらかな道ではないので、時々頭骨が地面に引っかかったりする。麻酔もなく皮や筋肉に切り込みをいれ、ロープを通して重いものを数百メートル引きずって歩く姿は、相当痛そうだ。その傷みが分かる分だけ、見ているサポーターの方も「ケネッチ頑張れ！」と応援してしまう。クリー族の人々は、高音の巻き舌で「ルルルルルルルル」と鳥のような声を上げていた。「ロープ」の応援をする時は、そうするのが慣習のようだ。

ケネッチが無事4周すると、子供達を4人集めて、バッファローの頭骨に一人ずつ座るよう命じた。子供達の体重で重くなったところで、ロープを引っ張り、肩の肉をちぎる。きれいに切れたら、「ロープ」は成功だ。思わず歓声が上がる。あとはメディスン・マンが熱処理した薬草を、ケネッチの傷口につめて処置を終える。この行為は、死なないまでも肉体の一部を傷つける、人身供犠の一種だ。現代にもそのような儀礼が残っていることに筆者はショックを受けた。これは、射精時にしか創造主に近づくこと

ができないとされている、男性なりの供犠なのだ。女性の出産時の傷みに近づくための供犠。成人になるためのイニシエーションとしてだけではなく、年長の男性も行わなければならないとは！　しかもサンダンスは4年続けて行うことに意義がある。年長者達の肩や胸にはいくつもの傷跡があるのを筆者は見た。

次に、58歳のケネッチよりも年がいくらか若いが、ジョニーというスウェット・ランナーもロープの供犠を行った。彼の場合は、聖なる木にロープを結びつけて、両鎖骨の胸の肉にナイフで傷をつけてロープを通し、自分の身体の重みで胸の肉や皮を切った。同じ日に、スピリチュアル・ネームをいただいた日本人の男性ダンサーが、ジョニーに「ロープをやるか？」と気軽に聞かれていて筆者は驚いたが、言われた当人も驚いていた。一種のイニシエーションのつもりだったのだろう。しかし、覚悟がいるものなので、そんなに簡単に「やる」とは言えない。通訳の女性が驚いて、即座に「ノーでしょう」と断っていた。サンダンスは男性の数、すなわち、4回続けて毎年行わねばならない。それを実行し続けるのも本当に大変なのだな、と筆者は思った。

②男性のイニシエーション（ピアッシング）

4日目に、ケネッチの養子である17歳のトロイが、初めての「ロープ」を行うことになっていた。前日ジョニーがやったあのロープだ。トロイは、2日目からダンサー参加していて、3日目から具合が悪そうだった。水分を全く摂れないので、熱中症気味だった。でもロープをやることになっていた。彼は挑んだが、ロープを切る前に失神しそうになった。彼は倒れ込んでしまったので、周囲に数人の男性達が集まり、彼をイーグルの羽の扇で扇いだりしていた。慌ててメディスン・マンも来た。遠くにいる私達にははっきり分からなかったが、失神しかけて青ざめて倒れ込んだトロイの意識は、それでも途中はっきりしたらしい。「ロープを完遂する」と言い、ロープで胸の肉が切られた。ケネッチ達は薬草で処置をし、彼を褒め称えた。そして体力の衰えたトロイに「あとは踊らず休んでいい」と言って、ダンサーのテントで休ませた。後にケネッチは、「トロイのロープの時、グランドファーザーがやってきて彼の肉体に宿り、信じられない奇跡が起こった」と私達に伝えた。トロイが失神しながらロープを完遂させたことを称えたのだろう（写真4）。筆者は複雑な気持ちでそれを眺めていた。

写真 4　トロイ (中央) と日本人男性ダンサーたち

異文化に住む、トロイの母親世代の女性としては、「親にきれいに産んでもらった身体にわざわざ傷をつけなくても」という感想を持ったからだ。しかし、これがその文化の伝統なので、「男性が苦行して女性の出産時の苦しみを疑似体験するのも、大変なことだなあ」と思いながら、事の成り行きを眺めていた。

③フレッシュ・オファリング（人肉の捧げもの）

女性ダンサーのキャシーやサンドラが、4 日目が終わる時にフレッシュ・オファリングを行っていたので、これも記録しておく（写真 5）。これは、片腕あるいは両腕[29]の肉に 5 カ所くらいナイフで傷をつけ、穴をあけて流れる血を捧げる。あらかじめ用意してきた布（白が多い）に血をつけて、聖なる木に特別な祈り（願い）とともに捧げる行為だ。ダンサーとしてテントで休んでいる時、ケネッチに言って、2 人がナイフで自分の肩の肉を捧げているのを隣で見ていて驚いた。これももちろんピアッシングやロープと同じく、麻酔なしである。出産する女性はそのような苦行を基本的に行う必要はないが、何か特別な事情がある場合は、このような供犠を行うそうである。彼らは肩の肉を切ることで、「傷み」を供犠するのだ。

写真5　女性ダンサーたち（左端は4日間踊り通したAさん）

「供犠」は「苦行」であり、「苦行」は「祈り」なのだ。4日間飲まず食わずで踊るダンサーの苦行や、ピアッシング、ロープ、フレッシュ・オファリングなどの一連の行為は、まさに「傷み」を供犠する苦行であり、祈る行為そのものである。サンダンスの最大の特徴は、「供犠」、「苦行」、「祈り」なのだ。彼らは誰に知られることもなく（写真や動画を撮ってはいけないので、基本的に秘儀である)、カナダの僻地で、自らの部族の繁栄と世界平和をひっそりと祈っているのだ。

6．伝統の再創造

カナダ・サスカチュワン州ホールレイク居留地で行われている先住民クリー族のサンダンス儀礼を現代的な文脈で位置づけてみると、次のようになる。それは「異文化に開かれたクリー族の伝統の再創造」である。2年前から日本人がグループで参加して関わってきたケネッチ主催初回のサンダンス儀礼は、当初、ラコタ（＝スー）族の19代目サンダンス正統継承者ウィリアムを始め、数人のメディスン・マン達が協議して、伝統に異分子を入れるか、かなり議論を重ねたという。彼らは夢の解釈やヴィジョン

を重視するので、初年度、日本人女性がダンサー参加を希望していることをその年の「聖なる木」に尋ねると、ウィリアムが片方の靴だけのヴィジョンを見たので、「まだ時期が来ていない」と判断し、ダンサー希望の女性は拒否されたのだという（その時の女性が今回4日間踊り通したAさんである）。初年度に日本人が団体としてサンダンスに参加するのを許可されるかどうか、夢で尋ねた時、数人のメディスン・マンが「侍が東の空から来るのを見た」と言ったそうだ[30]。その年のヴィジョンで日本人の参加が許された。日本人の祖先達が、集団で、クリー族の祖先達とともに、サンダンスを応援しに来てくれたそうだ。その夢のお陰で、私達日本人がサポーターとして、そしてダンサーとして、サンダンスに参加することが可能となった。「日本人グループは、サンダンス開催に準備段階から関わり、かなりの戦力になっている」と、坂口さんは述べている。両者の信頼関係があるから、今回これだけの人数がダンサー参加できるようになり、4日間も踊り続けることが許可されたのだ。

ケネッチを始め、クリー族は、自らをオープンにして、異文化である他者を巻き込んで、自らの伝統を再創造しようとしているのだと思う[31]。ケネッチに、筆者は今回のサンダンスについて論文を書いていいか確認したところ、快諾してくれた。この場を借りて、ケネッチを始め、関係者に謝意を表したい（写真6）。

写真6　サンダンサーたちとサポーターたち

注

1）サスカチュワンは、クリー族の kisiskāciwani-sīpiy の音に語源があり、「速く流れる川」という意味である。

2）坂口火菜子さんによる。坂口火菜子さんは、2007年以降毎年カナダを訪れており、メディスン・ウーマンのノラの指導のもと、男性儀礼のサンダンスと対になるウーマンズ・セレモニーを行う資格を得た。2016年 5 月にサポーターも含め、総勢100名からなるウーマンズ・セレモニーを宮崎で行った。坂口さんは普段、日本全国を北山耕平翻案『虹の戦士』（太田出版、1999年）を舞台で物語る行脚を続け、カナダや北米先住民の世界観やメッセージを伝え歩いている。

3）坂口さんによると、サンダンスの本質は祈りだという。「祈りと苦行は平行ではないです。自分を捧げる理由、それは祈りです。」（坂口火菜子さん談。2016年 9 月 1 日インタビュー、以下同）これは筆者がサンダンスを「苦行」として表現したことに対する坂口さんなりの反応である。現象を外側から見てしまう研究者と内側の視点にいる対象者との間には、現象の受け止め方に差異が生じる。サンダンスを「苦行」ととるか、「祈り」ととるかは、外側と内側の視点の差異が出ていて興味深い事例だと思う。

4）この12という数の子供はノラが今までに産んだ子供達で、他にトロイ兄弟などの養子もいる。ケネッチの連れ子はホールレイクにはいない。息子が 1 人、街に住んでいる。

5）故イーグル・ハートマン（ゲリー）は、スウェット・ロッジなどの儀礼を執り行う人（スウェット・ランナーあるいはランナー）で、ケネッチ、ノラ、ジョニーのチーフ的存在だった。ケネッチの姉シャロンの夫。

6）以下、坂口さんによる談話。「ゲリーが亡くなり、スウェットなどを行う人、つまり居留地の守り人がいなくなり、エネルギーが下がって、様々な事件、そして自殺が一時増えた。サンダンスについては、もともとクリー族に伝わるものではなく、ラコタ（＝スー）族のものである。ケネッチは幾つものサンダンスに出向き、自分を取り戻す過程を経験した。その中でも、ウィリアム（William H. Lavallee、スピリチュアル・ネームは「四つの魂」）というラコタ族19代目直系のところに20年以上通い続け、とうとうケネッチがそれを受け継ぎ形にした。クリー族のサンダンスの最初は 2 年前にケネッチが始めたことで、筆者が参加したクリー族のサンダンスの 3 年目が今年2016年だった。いずれにしろ、サンダンスはクリー族本来のものではなく、ラコタ（＝スー）族由来が起源である。」

7）カナダ政府の先住民保護政策は手厚い社会保障によって彼らを守る一方、居留地に彼らを囲い込んで飼い殺すようなシステムになっていることも否め

ない。

8）ケネッチは今では演劇以外の他の仕事もしている。

9）「最後というよりは、1サイクルを終えるイメージ。なので、何らかの必要性と覚悟を持てば、また4年やる可能性は十分にある。『4』は男の数である」（坂口さん談）。

10）ただし、カナダ政府より先住民保護政策の一環としてサンダンスなどの儀礼を行うために補助金は出ている。

11）スウェットは悩みを吐き出し、共感する場であるが、根本は「祈りと感謝の場」である。また、色んな種類のスウェットがある。ドクタリング・スウェット（治癒目的）、イーグル・スウェット、バッファロー・スウェットなど（坂口さん談）。

12）小川純子さんによる談話（2016年10月15日インタビュー）。

13）「昔々、人々が敬うことを忘れた時、バッファローも鹿もやって来なくなって、みんなひどい飢えに陥った。家族を飢えから救うために、二人の兄弟が狩りに出かけた。そしてそこで美しい女を見た。兄弟の一人は言った。『あの女を俺の褥に連れて行く。守る男もいないようだから。』だが、もう一人の兄弟は言った。『いや、あの女は聖なる者ワカンだ。関わらないほうがいい。』しかし、最初の若者はすでに女のほうに駆け寄っていた。女は振り向いて、若者にそばに来るよう合図をした。若者が女に近づき、その体に手を触れた途端、強烈な砂埃が巻き上がって二人を包み込んだ。砂埃がおさまった時、地面には若者の骨だけがあって、その上をたくさんの蛇が這い回っていた。女はもう一人の若者にも、そばに来るよう合図をした。若者はすっかり怯えきっていた！　それでも女がワカンだと分かっていたし、敬うことも知っていた。女は若者に命じた。部落に帰って全員を集め、三日後に女が訪ねて行ってあることを教えると伝えよ、と。人々は集会のためのティピ（円錐形のテント）を作り、そこへ女がやってきて多くのことを教えた。敬うこと、互いに調和を保って暮らすことの大切さなどだ。女は人々にパイプを与え、パイプにまつわる7つの儀式も教えた。その教えは未だに続いている。女が草原の向こうに歩き去る時、砂埃が彼女を包んだ。それが鎮まった後に、白いバッファローの仔が地面を転げ回っていたという話だ。だからその女は、『白いバッファローの仔の女（White Buffalo Calf Woman）』と呼ばれている。」コーガン、前掲書、40頁。

14）エリコ・ロウ著、『アメリカ・インディアンの書物よりも賢い言葉』、扶桑社文庫、2016年、118–121頁。

15）白いバッファローの仔の女は、7つの儀式を伝えたという。サンダンス、スウェット・ロッジ、パイプ・セレモニー、ヴィジョン・クエスト、命名式、治療の儀式、親戚として受け入れる儀式がこれにあたり、女性儀礼であるウー

マンズ・セレモニーはここに入らない。沖縄・久高島の女性儀礼であるイザイホーに似ていると言われているウーマンズ・セレモニーは、それよりずっと前からあるという説もある。

16）「メディスン・ホイール」とラコタ族では呼ぶが、クリー族ではそのような名称は使っていなかった。

17）クリー族では使われていなかったが、文献によると、他の地域では円形の聖域を「メディスン・ホイール」という。

18）チェリー・チョークは東西南北のゲート用で、バッファロー・スティックはウィローの場合もあるという。しかし、今年の場合は少なくともゲートと同じく、チェリー・チョークだった。

19）結界に使ったバッファロー・トレイルの枝に使うタバコ・タイズの色は全部赤である。東西南北のゲートだけ、各方角色の布を吊るしてある。皆で作った4色のタバコ・タイズは木に巻きつけた。

20）パイプ・セレモニーが7ラウンドで、帰るラウンドを含めると8回踊るようだ。

21）例えば、今回のサンダンスにダンサー参加したジョニーというクリー族のスウェット・ランナーの大きなパイプは、最近ソープストーンで自分で作ったものだった。基本的にサンダンス中のパイプ・セレモニーで持ち寄られるものは、それぞれのパイプ・ホルダーが先祖から受け継ぐパイプである。「白いバッファローの仔の女」から渡された本物のパイプの継承者は、アーボルド・ルッキングホースというサウスダコタ州に住むラコタ族の男性である。

22）火皿は女で、柄は男である、とは他の文献にもある。「ばらばらの時は、ただの火皿と柄にしか過ぎない。だが、こうして一つになると、全宇宙が出来上がるんだ。一体になることによって、聖なるものに変わる」。プリシラ・コーガン著、ハーディング・祥子訳、『老女の聖なる贈り物』、めるくまーる社、1999年、35頁。

23）年長者（エルダー）達は裸足で行っていた。天然素材以外のものをサンダンス・グラウンドには入れないのが原則である。

24）「ヘルパーと観客の区別はない。あの場に居合わせるのは、チーフ、ダンサー、ドラマー、シンガー、そしてヘルパーのみ」とは坂口さん談。文中のサポーターはヘルパーの意。

25）男性の数が4で、女性の数が3であることから、おそらく男性は4回、女性の場合は、少女から結婚できる女性、老女になる人生の通過儀礼の中で、3回はスピリチュアル・ネームが変わるのではないかと思われるが、未確認である。

26）2日目のこと。3日目のヒーリング・ラウンドにダンサー参加する日本人男性Tさんが、ダンサーとして参加する前に名前を頂くのがいいとケネッチ

の妻ノラが考えたそうだ。

27）伝統的には米と干し葡萄を使うようである。ブルーベリーは干し葡萄の代わりだと、クリー族のメディスン・マンのジョンが許可していた。この名付けのための宴の食事を用意するのは成人男性だけで、米と干し葡萄（ブルーベリー）の準備についてはこの二人以外は触れてはならなかった。他のメニューはそれ以外の人でも手伝うことができた。

28）坂口さんによれば、「私はこのイニシエーションという表現に違和感あり。儀式は挑戦でもイニシエーションでもなく祈り。結果、イニシエーションになる（見える）こともあるだろうけれど、これが当初からの目的に含まれると儀式の意図が変わってくる。このような行為なしに立派な男性に、人に、インディアンになれる」という。ただ、宗教学では「イニシエーション」という用語が適切なので、本稿ではそれを使う。

29）「両腕でも片腕でも良いし、切り口個数は自分で選ぶ。私は去年右肩に女性の数字である3ヶ所をノラと共に選んだ。」とは坂口さんの談。

30）以下、19代目ウィリアムについての坂口さんによる補足である。「それまで一切の赤い人（ネイティヴ・アメリカン）以外には閉鎖的であったウィリアムのサンダンスライン。しかし、ある時に『赤、黒、白、黄が一つになる時だ』と実感したらしい。だから『扉を開こう』とウィリアムは内に決めた。とは言っても、何かしらの形で告知するようなことはない。しかし、その年（2011年）のウィリアム主催のサンダンスにケネッチに連れられて、日本人である私が、他、様々な縁で数名の赤い人以外が「図らずも」参加することに初めてなる。つまりウィリアムが内なる宣言をした後すぐに新しい流れが生まれた。この『一つになる時』というヴィジョンにより、ウィリアムから受け継ぐケネッチのラインが日本人をこんなに受け入れ、結界には彼らの伝統的なタバコではなく麻のオガラを使う（2014年はタバコも使って二重の結界にしていたが、今年は麻のみ使用）までになっている。」

31）ここで前提にしている議論は「伝統とは昔から受け継がれてきたものと考えられているが、その多くは実は近代に入ってから新たに人工的に創造されたものである」というイギリスの人類学者エリック・ホプスボウムの議論である。彼はイギリスの事例を取り上げている。全てがそうだとは限らないが、もともとラコタ族由来のサンダンスを現代のクリー族が自分達の伝統として取り入れている、という点で、ホプスボウムの議論も適用できるだろう、と筆者は考えている。エリック・ホプスボウム、テレンス・レンジャー編著、梶原景昭他訳、『創られた伝統』、紀伊國屋書店、1992年。